

住まいとまちをつなぐ生活文化の持続可能性

久しぶりに神戸の住吉山手を歩いた。かつて阪神間モダニズムと呼ばれる生活文化を生み出し、その豊かさを支えてきた地である。今も通りには邸宅の生け垣や庭の緑が続き、門構えの向こうに洋館の屋根が垣間見える家が点在する。庶民からはほど遠い住まいかもしれないが、その生活文化が地域の生業を支え、地域を特徴づけてきた。この文化を次世代に伝えることが困難な状況がある。かつての生活の場は店や美術館になったり、放置されたり、空き地も点在していた。

空き地はまちの変化の過度的状態である。最近では空き地や空き家が増えている。利便性の高いところでは、土地が売られ、分割分譲されたり、マンションが建ったりすることで、少しずつ風景が変わっていく。しかし、人口が減る今は、空き地や空き家が長く残る。

こうした普通のまちでは記憶はあっても記録がないことが多い。阪神・淡路大震災後の復興市街地では、多くの住宅が建てられることでまちの風景が変化するとともに、人も入れ替わった。復興とは元に戻ることでないことを、被災した人々は実感した。芦屋市では震災後8年で震災前から住んでいた人は約5割になっていた。新しい居住者と生活の記憶が共有されないまま変化が今も続いている。このまちの変化はどこに由来するかと

いえば、まちと切り離された「住宅」にある。これは多くのまちや集落に共通してみられる。

都市も集落も長い時間のなかで変化を続けている。より安全で豊かな暮らしを求めて変化することが、住環境や生活文化を多様化させ洗練させることにつながっていた。ところが、今、「住宅」がまちや集落とのつながりがなくても建てることができ、地域の生活文化と関係なく商品となって流通する、といった状況がある。こんなことは当たり前ではないかと言われそうだが、この当たり前が住環境の評価を画一化させている。

暮らしが集まってまちや集落が形成される。地形や風土との折り合い方、そこでの生業や仕事のやり方、地域の材料や建築の技術が、住まいのかたちとなり、まちや集落のかたちとなって現れていた。住まいは、建築物という物的空間と暮らしの文化の相互作用によりできるものであり、地域によって多様である。しかし、今、「住宅」というときには、暮らしの文化が消えているように思われる。確かに量的供給が求められていたときには、品質の安定した生産を担保する技術開発の役割は大きかったが、その結果、住まいは「住宅」となり、「住宅」は敷地に閉じこもり、住戸としての性能が追求され、まちや集落とつながる地域文化や、まちや集落をつくる力を喪失しつつある。

大阪大学大学院 工学研究科
地球総合工学専攻 准教授

こ うちら ひさ こ
小 浦 久 子



こうしたことが景観の混乱や風景の喪失となって意識される。歴史的市街地や田園地域でのサイディング材に覆われたプレハブ風の箱形の住宅や大規模なマンションなどはわかりやすい混乱要因となるが、多くの普通の住宅地では、個々の敷地単位で土地が売買されたり、建て変わったりしながら、少しずつ変化するときには、あまり変化に気づかない。こうした変化がまちや集落の住環境とつながる変化になるよう、個々の変化を評価することが重要である。

確かに、住宅品確法による住宅性能表示や長期優良住宅の認定制度は、規制基準ではなく、よりよいものを評価する基準ではあるが、その対象は住戸の性能であって、立地、配置やボリュームの構成、庭や敷地内空地の使い方など、住宅がまちや集落につながるための基本、デザインの基本についての認識はほとんどない。また、基準化された住宅の作り方が評価されやすく、技能や知恵によるゆらぎや地域の暮らし方による違いは評価されにくい。地域や生活文化につながる住まいのかたちは、技術だけで解決すべきものではない。

次世代エネルギーによる新たな社会システムであるスマートシティは確かにエリア・マネジメントの技術として環境に寄与するところは大きいですが、そこで語られるまちはシステムでしかない。多く

の技術は、その性能やシステムがもたらす空間の可能性を示すことでしかなく、住まいの空間の質はそこに住む人々が決めることになる。そこに暮らし方の文化がある。これからの地域の状況に応じた高齢社会でのサービスや支え合いのあり方、自然や風土のもたらす危険への対応の考え方、公共空間のつくり方やつかい方などは、これまでもこれからも暮らしの文化であり、まちや集落をつくる住まいのかたちを決める。計画とは、暮らしの文化をデザインすることである。

だからこそ東日本大震災の被害の大きいまちや集落で、今の、そして、これからの住まいを考えることが重要になる。高台移転とは、本来、造成を意味するのではなく、危険なところには住まない選択をすることである。技術がシステムとしてのまちや集落しか示し得ないように、事業制度もまた、その事業でできることしか示し得ない。もう一度住まいをつくっていくためには、事業と合わせて暮らしの文化の視点から、どこにどう住むかを考えてみるのが大事である。

住生活基本計画は何を求めているのだろうか。計画課題が住宅から住生活になることは、住宅を、住戸から生活の場としてとらえなおすことへの変化とりたい。住環境を考えることは、住まいからまちや集落を計画することである。